研究課題名：某健康保険組合のビッグデータを活用した医療費、健康状態、
口腔内状態の関連性に関する研究

研究者名　：市橋透[1,2]、後藤理絵[1]、春山康夫[2]、武藤孝司[2]、小橋元[2]
所　　属　：[1] 公益財団法人ライオン歯科衛生研究所
[2] 獨協医科大学医学部公衆衛生学講座

【目的】

本研究は、職域で実施する歯科健診への受診が口腔内状態および医療費、歯科医療費などへの影響を明らかにすることを目的に行なった。

【対象および方法】

対象は東京に本社のある某企業健康保険組合の被保険者で、当該某企業および健保では2002年から定期健康診断に併せ、全従業員を対象に当財団が毎年歯科健診を実施した。2002 から2007 年までの診療報酬明細と歯科健診結果について連結匿名化データベースを構築し（n=3,508）、歯科健診への受診と口腔内状態、医療費、歯科医療費との関連性の解析を行った。

【結果】

１．口腔内状態（未処置歯、歯周病）について

各年度の受診者での未処置歯の比較では、ばらつきはあるものの 2002 年（0.47 歯／人）から 2007 年（0.30 歯／人）にかけて減少した（p<0.001）。歯周組織の状態（CPI）でも歯周ポケットを保有する者の減少と歯肉所見の無い者が増加した（p<0.001）。未処置歯と歯周組織の改善は、いずれにおいてもすべての歯科健診に受診した者で顕著であった

２．歯科健診への参加回数別比較

6 年間の歯科健診への全対象者について、参加回数別（3 回以下、4-5 回、6 回）に入院外歯科医療費の累積値の多変量解析（年齢と性別で調整）での推定平均値は 3 回以下（108,140 円）で最も高く、4-5 回（102,962 円）、6 回（96,702 円）と参加回数が多くなるにしたがって低く、3 回以下と 6 回の間で有意差がみられた（p=0.034）。

３．歯周ポケットの有無別の医療費の比較

すべての歯科健診に受診した者について、2002 年と 2007 年での歯周ポケットの推移別に歯科入院外医療費の累積値を比較したところ、20～39 歳群では有意差は認められなかったが、40～59 歳群では、2007 年の累積値で歯周ポケット「02 無→07 無」群では 99,145 円であったのに対し、「02 有→07 有」群では 148,388 円（p<0.001）で約 5 万円高かった。

【まとめ】

本研究から、歯科健診の実施によって未処置歯と歯周組織の状態の改善がみられ、その有益性が認められた。歯科医療費においては、すべての歯科健診に受診した者で未受診者に比較して有意に低いことが認められ、定期的な歯科健診の重要性が示唆された。また、20 歳～39 歳群に比べ 40 歳～59 歳群においては、歯周ポケットを保有している状態で推移した者では、歯周ポケットが無い状態で推移した者に比較して歯科医療費の有意な増加が認められたことから、若い時期からの口腔保健に関する予防施策の重要性が考えられた。